



生きものの情景



藤本義一



生きものの情景

定価 七〇〇円

昭和四十九年二月十五日 印刷

昭和四十九年二月二十五日 発行

著者 藤本義一

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 東京ベル印刷 製本 正文社

目次

山下清の動物世界 七

“個性的”カメレオンの変色 一六

オスがメスをえらぶのか？ 三

動物との靈的交流について 二六

ねこのね、ねこのこ、こねこのこ 三〇

馬らしい馬、バンバの雄姿 三四

モグラと殺人事件 三六

ミイラになったネズミ 四〇

珍獣パンダは見なくていい 四四

家出少年の記憶 四八

台湾にて——「ちちよ、ちちよ」と鳴く虫 五二

タイにて——象の訓練所 五九

鈴虫は生命を謳う 六三

ある四行詩の思い出 矣

捨て犬チビ太の学習 ㊦

実験動物は悲しいか ㊦

カンガル―にみる母の“偽愛” ㊦

人間——この哀れな動物 ㊦

病床の父に想う ㊦

動物ショーの一つの見方 ㊦

野性はなぜ美しい ㊦

動物にとって自由とはなにか 二〇三

はるだんじ 春団治 鼠羽織咄 二〇六

盲の蜘蛛に生命を見た 二〇

屁とともに去りぬ 二〇四

数をかぞえるオキツネサン 二一八

数学者岡潔先生の死生観 二二三

オニヒトデを食うホラ貝 一三〇

自分が猫だと思っている犬の話 一三三

おなかをこわしているひとは、よまないでください
便秘解決野性味横溢排便法 一三八

ナマケモノの喧嘩 一四三

フクロウと真夜中の対決 一四六

動物に淫した人 一五〇

郵便配達の厄日 一五五

「淀川には星も映らん」 一五九

海ネコの島に糞弾ふんたんが降る 一六三

馬の種付けはいやらしいか 一六六

「幻の蛇」ツチノコ情報 一七〇

東北の板前さん 一七五

「自殺は人間のたかぶりや」 一八二

「牛人一体」の生き方 一八六

恐竜を組み立てるロマン 一九〇

擬餌・魚拓・剥製はいやだ 一九四

イルカの一日調教師 一九八

管理社会——自然動物園のアンハッピー 二〇二

閉鎖社会——ジェット機内にみるヒトの環境づくり 二〇六

いたずらの過ぎるダチョウ 二一〇

颯爽！ 闘牛士登場 二一四

タローは日本の犬だった 二一八

守りを忘れた魚たち 二二三

カラスの親子 二二六

ミツバチの狂宴 二三〇

ぼくとおかあちゃんの夕焼け 二三四

さようなら 二三六

生きものの情景

『アニマルライフ』（昭和四十七年八月八日号～昭和四十八年十二月十八日号）連載

山下清の動物世界

先年亡くなられた放浪画家の山下清さんと、ほんの暫くの間つき合う機会があった。その理由は山下さんをモデルにした二時間あまりの舞台劇を書くためであり、実際に、悪い表現だが、人間山下清を観察しなければならなかった。ほんの小さな動きでも、言葉でもつかまえて、メモしておき、人物像をつくりあげなければならないのである。

放浪の生活の中で、山下さんの精神は自然に急に近づくのを自ら拒否しているところが見うけられた。

金魚鉢の中で泳いでいる金魚とか、水槽の中で泳いでいるグッピーやエンゼル・フィッシュに近づく時、山下さんは肥った体を折りまげながら、怯^{おび}えた様子で近づいていくのである。坊主頭を撫でながら、および腰で、目をちょっと細めて近づいていくのだが、それは小さい動物たちに精いっぱい敬意をもって近づいてゆくというふうであった。挨拶をするように一匹一匹に小さ

く頭を下げる図を想像してほしい。

これは動物たちに限ったことではなく、花や草に対する姿勢にも見うけられた。自然の中に入っていく順序を探し求めているようにも見えたものである。

「今日は、元気ですか」というような時もあり、「ちょっとおじゃましますよ」といった感じの時も見うけられたものだ。

「どうして、そんなふうな姿勢で近づくのですか」

というと、

「お、おどろかしては、い、いけないからな、やっぱし……」

と、吃り口調でいわれたものである。また、ある時は、

「ぼ、ぼくも、な、仲間入りさせて下さいと、い、いってるんだな、やっぱし……」

ということであった。自然の中に同化していく自分を、それらの瞬間、瞬間にとらえていき、そして、その中での執拗な観察が、動物たちの生態とか色彩を的確に掴んでいくのであった。目を一匹の魚に集中させれば、それが藻の中にもぐりこんでいけば、右から左から、上から斜めから眺めて、いつの間にか自分が一匹のエンゼル・フィッシュになったかのように、両手をヒレがわりに動かし、見ているぼくの方はうらやましいかぎりであった。

「だけど、動物や魚や虫は、む、難しいな、動いているからだな。動いているから生きているん

だな。生きていても動かないことがあるけれど、あれは休んでいるからだな。やっぱし……」

お化けの絵の方がいいということだった。それは頭の中で自由に動いている楽しい架空の生物たちであり、自由に把握することが可能な生物たちであつたからだろう。しかし、目の前で動いている動物たちは、ほんの少し目をはなすだけで姿勢を変えてしまうから、難しいというのである。じゃ、花火はすぐに消えてしまうのに、どうして貼り絵にするのですかと聞くと、あれはあまりにも強烈すぎて、頭の中のフィルムに焼き付けられるからだという。自然は強烈なものではなくて、自然は柔らかに自分を抱いてくれるものであり、その自然の中の動物や草花は、記憶の世界をおぼろに泳いだり、はねたりするようだった。

「サ、サルは人間に近いというけれど、ほ、ほんとうかな。サ、サルがそう思っているのかな。

それとも、サルの方が人間に近いのではなくて、人間の方がサルに近いのでは、ないかな」

なかなか鋭い文明批評だった。猿が木から降りて来て人間になつたのではなくて、人間が猿になり切っていないのではないか。木にも登れず、尻尾で枝に下がることも出来ない人間が、強がりいつてるのではないかという説は面白かった。

「なんととってもシカはいいな、やっぱし。あの角はいいな。立派だな。角にもいろいろあるな。みんな違うな。シカはやさしい顔していて、やさしい目をしているし、おかあさんのシカや子供のシカを角のはえたのが守っているんだな、やっぱし……」

あれは奈良公園で鹿を見て来た夜だったと思う。画家の目は一頭の鹿と群れの鹿を何時間も追っていたのである。角に美の極致を発見し、かなりの興奮であった。といって、すぐに鹿を描くというのではなく、自分の記憶の中の鹿を幻想のなかで組み伏せようとする苛立ちが見うけられた。「あのシカの中の一頭が、もし人間を突いて怪我させたなら、人間は怒って、その一頭のシカの角を切るだろうな。それから、他のシカもみんな角を切られるだろうな。なんにもしていないシカも切られるのは可哀想な話だな。人間の知恵は、そんなものなんだな……」

この素朴な疑問と意見を、ぼくは時々思い出すのである。

山下さんと行動を共にしていると、実に意外な質問をうけたり、明解な答えを得たものである。動物と人間のかかわっている諺などが飛び出してきて面くらったものだ。

「柳の下のドジョウとは、いったいどういうわけか」

などと聞かれるのだ。そこで、ぼくは、ある人が柳の下で泥鰌どじょうを取ったのに味をしめて、その翌日もまた同じ場所に行ったところが、いかなかったのだといい、うまい話はそう簡単に転がっていないという意味だというと、山下さんはすかさず、

「どうして、ドジョウが柳の木の下にいたのだろうか」

と訊たずねるのである。

「そりゃ、まあ、偶然にいたのではないですかね」

という、

「いや、そうじゃない。偶然にいたとは考えられない。柳の木の下にドジョウがいなければならぬ必然性があった」という意味のことを五分間ぐらい、ゆっくりと説明されるのである。山下説によると、川に棲んでいる魚は、鳥の襲撃から身を守るために、川面に垂れ下がった柳の木の下を選んだのではないかというのである。そういわれれば、なんとなく理由があるように思われる。

「しかし、ドジョウは泥の中にいるわけでしょう。だから、別に柳の木の下に隠れていることもないでしょう」

と、ぼくも負けずに反論すると、いや、泥鰌は生まれてから死ぬまで、凝^じっと泥の中にいるわけではないから、と山下さんは主張するのである。

「遊びにふらっと出たい時もありますから、やはり、柳の下がいいのです」

放浪の画家らしい主張であると思ったものだ。万事がこの調子なのだから、ぼくは、ほとんど弱ったものである。

「犬も歩けば棒にあたるというのは、どういうことだろう。これは、野良犬が出歩くから棒でたたかれるのだろう。おとなしく出歩かなかったなら棒で打たれることもないということなんだ

な、きっと。これは、人間は出しゃばればいけないということなんだな、やっぱし……」とか、
「トドのつまりとはなんだろうな」

と問われるので、トドというのは、ボラという魚の大きいやつで、それ以上はもう大きくならないから、問題などが行き詰まったり、あるいは、物事が頭うちになったりの時の形容なのだというと、

「それでは、ボラの小さいのはなんですか」

と、すかさず聞かれるのである。だから、それはイナというのだといい、イナが川から海に出て三〇センチぐらいになるとこれがボラだと答えると、

「それなら、イナの小さいのはなんだろうな」

といわれ、こっちは頭をかかえざるを得ないのだ。すると山下さんは弱りきったぼくの顔を見て、

「イナよりも小さいのはスバシリといい、スバシリの小さいのをオボコというのだなあ、やっぱし。オボコの小さいのをハクといって、ハクは三センチぐらいの小さなのをいうのだな」

と、逆襲をうけるのだ。山下さんは、つねに兵隊の位を持ち出す人だが、この場合も、ハクは二等兵であり、オボコは上等兵であり、スバシリは少尉、イナは少将、ボラは大将、トドは元帥だという。はじめからみんなわかっていくせに、山下さんは、ぼくをテストしたわけなのだ。

「どこで習ってきたのですか」

というと、放浪の時に、漁師のおじいさんに聞いたという。

「ああいうのを知っているのはおじいさんしかないな」

村の古老から裸の大將がじっくりと聞き出す図を想像するだけでも、気分がゆったりしてくる。

「トドという名はどうして出来たのかな。誰がつけたのかなあ」

こいつはうかうか出鱈目でたらめを答えられないぞと用心していると、

「これは昔の人がつけたというのだなあ、やっぱし……」

と見事に肩すかしを食わされ、なんだ、そんな答えだったのかと、安心した顔をしてみせると、山下さんは、すかさず攻撃をかけてくるのだ。

「トドメとか、トドマリとかいうのだな、これは……。だもんで、漁師はトドとつけたのだな」と、これはまた見事な解釈を下して、ぼくはもう、なにもいえなくなってしまうのだ。

この観察、聞き覚えが、動物に対するぼくたちにどのくらいあるだろうかと思うと、恥ずかしくなる。

スタジオに山下清さんを招いて、いろいろと自由に質問をすることになった。司会者であるぼ

くは、内心びくびくしていたものだ。うっかりした質問なんぞは出来ないからだ。反対に、ぎゃふんとやられる率が非常に高いからである。

「どうして、海の水はからいのに海の魚はからくないのかなあ」

などとやられた日には立往生してしまわなくてはならない。そこで、ぼくは山下さんの放浪時代の話を主に聞くことになったのだ。はじめに、ちょうどその頃、山下さんの才能を抽き出した式場隆三郎先生がお亡くなりになったこともあって、先生についての話から語り出したわけだ。「そうだな、先生は死んだな。死んだというのは、いなくなったということだな。いなくなったというのは会えないということだなあ。会えないというのはしゃべり合うことが出来ないということなのだなあ」

話は、こういうふうにつづいて、

「さびしいですか」

と訊くと、山下さんは意外な質問だとばかりに、ぼかんとぼくを眺めて、

「さびしくはないな。一向にさびしくはないなあ」

といったのだ。ぼくも一瞬、ぼかんとした。期待していた言葉ではなかったからである。

「へえ、さびしくないのですか」

というと、山下さんは、先生の体は焼かれて消えてしまったけれど、先生の心とが気持は自分